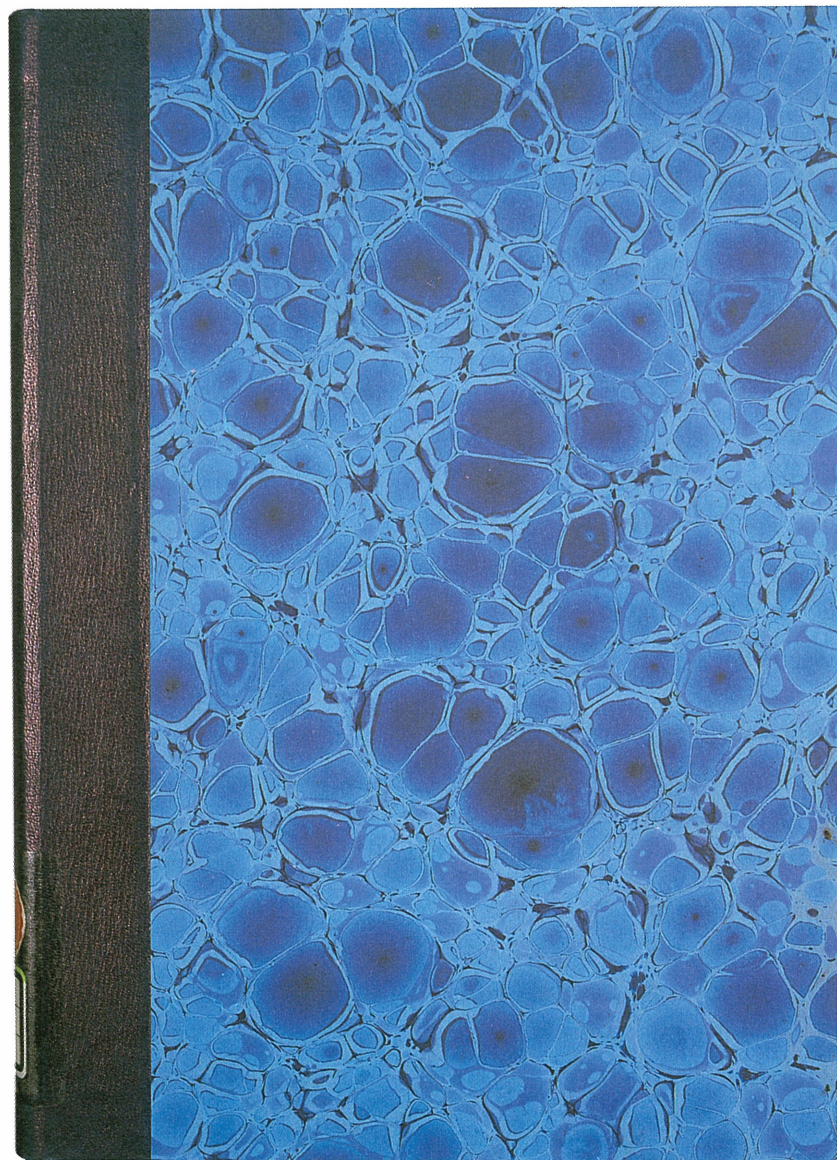


北里大学教養図書館

関 覧 ニ ュ ー ス

50 号

1986 . 12



タングラム版『フィロピロン —書物への愛—』
背革装 限定番号 第284番

図書館と本と

高 津 昌 宏

図書館について書けとの仰せであるが、普段から怠惰な私は図書館というものをあまり利用しないし、ましてや読者諸賢にお聞かせできるような、取って置きの“情報”などあるはずもない。そこで只今、憂鬱な気分になんて沈んでいるのだが、只々筆の赴くまま、気の向くままに、図書館と本とについて綴ってみることにしたい。

憂鬱といえば、まだ季節は早いのであるが、“沈丁花の憂鬱”という言葉があるそうだ。沈丁花（因に“ジンチョウゲ”と読む）は庭木にする常緑低木で、春先、内側が白、外側が赤紫色の香気の強い花をたくさんに開く。ちょうどこの花の開く季節が“沈丁花の憂鬱”の季節なのである。慶應義塾出身の歌人吉野秀雄の歌の一つにそうした憂いが歌われている。“図書館の前に沈丁咲くころは恋も試験も苦しかりにき”と。

私もその慶應義塾を出た人間の一人なのだが、先輩歌人吉野秀雄のような感性の持ち合わせがないらしく、在学中恋にも試験にもあまり苦しんだ覚えがない。だが、この歌と三田の旧図書館とを結びつけて考えるとき、こうした歌が生まれ出た理由だけはわかるような気がするのである。三田の旧図書館にはこうした歌を歌いたくなるようなロマンティックな雰囲気があった。

☆

さて、私は英語の時間の教材の一つとして、ジェームズ・カーカップの書いた『変りゆく文化』なる本を使っている。その中に、谷崎

潤一郎の『陰翳禮讃』を種にした一章があって、“暗さと涼しさは上品であるが、一方熱と光は下品である”という結論に達する。その過程で、カーカップは谷崎が暗さと涼しさを提供するものとして日本の厠を賞賛していることについて書いている。谷崎曰く、“日本の厠は実に精神が安まるようにできている。しかるに、近代的な衛生設備では白いタイル張りの壁から照り返す光が全ての夢や美しい想いを壊してしまう、というのである。

厠と図書館を一緒にすると、図書館関係者から文句が出そうであるが、図書館についても以上のことが多少なりとも当てはまるような気がする。私が好きなのは、多少薄暗くて、ひんやりとした感じのする図書館である。閲覧室の明るさも、手元が明るければ良いのであって、まわりがあまりに明るすぎると、“全ての夢や美しい想い”を壊されてしまって、とても文学どころの騒ぎではない。窓から燦燦と陽が降り注いでいたり、冬、暖房が効きすぎていたりするのは、居眠りをするには良いけれども、読書には身が入らない。もちろんこれは私の主観であって、あるいは自然科学や社会科学を専攻している方々、否、文学を専攻されている方でさえ、これとは全く違った意見をもっておいでかもしれない。しかし、私には、事文学を読んでいる限りにおいて、このように感じられてならないのである。

☆

慶應の旧図書館は今述べたような“翳り”を与えてくれる図書館であった。ところが、

私が2年間慶應から離れている間に、三田のキャンパスには新図書館ができ、図書館としての機能はこちらに移された。私は大学卒業後、大学院修士課程2年間を早稲田で学び、博士課程で再び慶應に戻るとい、いささか変則的なコースを辿ったのである。この新図書館はスペースも広く、設備も整っていて、立派なことは立派なのだが、どうも旧図書館がもっていた“翳り”と“品位”に欠けているような気がする。もっとも、そうした“翳り”や“品位”は年を経て歴史の重み加わるにつれてでき上がっていくという側面もあるのかもしれないが。

☆

ところで、新図書館が旧図書館に比べて便利になった点の一つに、館内を自由に歩きまわって本を探し出し、その本のコピーを館内で自由に自分でとれるようになったことがあ

る。ただ私はどうもコピーというものが好きではない。好きではないけれども、必要に迫られるときには仕方がないからコピーをとる。

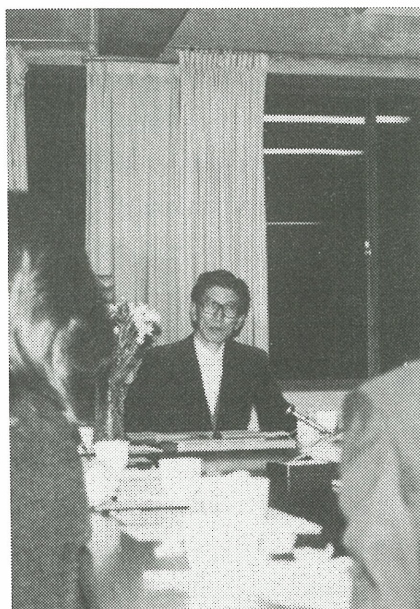
コピーということで、私はヴァルター・ベンヤミンが芸術作品の一回性と現代の複製文化の関わりについて論じている文章（『複製技術の時代における芸術作品』1936）を思い出す。ベンヤミンは芸術作品の一回性、すなわち“ほんとう”の芸術作品は“いま”“ここに”しかないという性格をもっているという特質を“アウラ”という概念でとらえた。つまり“ほんとう”の芸術作品にはそれのみがもちうる光輝が備わっているということである。しかし複製技術の進んだ時代にあつては、そうしたアウラは減びていき、一回かぎりの作品のかわりに、同一の作品を大量に出現させ、こうしてつくられた複製品をそれぞれ特殊な状況のもとにある受け手のほう

「なんじゃもんじゃ」ってなんじゃ

去る10月22日(水)午後4時20分から6時まで、教養図書館閲覧室に於いて「なんじゃもんじゃ」について話し合い会を開催した。

発表者に薬学科1年の鎌田和夫さんを迎え、『なんじゃもんじゃ』との出会いや体験談を中心に話が進んだ。その後、茶話会形式で年齢にとらわれず卒直に質疑応答を行ない、和気藹藹のうちに閉会となったが、余韻さめやらぬ人達は、しばし談笑する姿も見受けられた。

写真は、講演中の鎌田さんです。当日の参加者は23名でした。



☆☆ 国内・国外を問わず文献が入手出来ます。問い合わせはカウンター（☎8005）まで ☆☆

へ近づける傾向が優勢となっていく。アウラを崩壊させることこそ、現代の知覚の特徴であり、現代の世界では、“平等にたいする感覚”が非常に発達していて、ひとびとは一回かぎりのものからでさえ、複製によって同質のものを引き出そうとする、とベンヤミンは論を進めていく。

これを踏まえて本のコピーということについて考えてみるならば、とにかく読めれば良いということでは本をコピーすることは、一見書いてある内容に敬意を払っているようにみえながら、そこには本質的なところで本というものを否定する精神が働いているように思える。まず第一に、それは本が“もの”であるということを忘れている。確かバーナード・ショーだったと思うが、“近頃では本は見るものでなく読むものになってしまった”と皮肉を込めて言っている。ショーに限らず、イギリス人は本を思想の集積とのみみることにためらいをもっているようである。アイリス・マードックの『砂の城』をたまたま読み返していたら、主人公のモアが自分の勤めているパブリック・スクールの元校長デモイトの蔵書を見て、“本はまず第一にものである”ということをしみじみと悟る場面がでてきた。

これらの文脈から分かって頂けると思うが、ここでいう“もの”とはベンヤミンのいう“芸術作品”ということに他ならない。本は思想の集積であるとともに、それ自体芸術作品であるべきだ、とこれらの文人はいつているのである。それに対して、図書館にある本にしたらってそれ自体大量に印刷されたものの一部という意味でコピーではないかとの反論がある。私はこの反論にこう答えたい。プラトンが芸術をアイデアの影の影にすぎぬといって、それに低い評価を与えたのと同じ論理で、コピーはコピーのコピーであるという点で私

はそれが嫌いなのだ、と。プラトンが芸術をこのように貶めたのは、彼が芸術のもつデモニーシユな力を十分に知っていたからなのだが、コピーの方はそれとは逆に、そのデモニーシユな力を全く奪ってしまい、美に対する鈍感とパターン思考しか残さないような気がする。T・S・エリオットは17世紀以後の文明の特徴を“感性の乖離”という言葉でいい当てたが、本のもつアウラを消滅させていくコピーは、まさに感性の乖離のあらわれに他ならない。

だが、そんな理屈をこねる前に、実際問題として、コピーを自由化したことによって、慶應の図書館の本もかなり痛んでいるらしい。私はこうしたサービスの向上を全く否定するのではないが、一方で本のもつ芸術性ということにももっと注意が払われて然るべきだ、と言いたいのである。 (英語)

冬休み中のお知らせ

冬期休暇中の開館、貸出等については
下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 12月11日(木)~1月14日(水)

冊数制限はありません。

(但し、雑誌は対象外です)

2) 開館時間

12月15日(月)~12月25日(木)

1月5日(月)~1月7日(水)

平日 午前9時から午後5時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

1月8日(木)~

平日 午前9時から午後6時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

3) 閉館

12月26日(金)~1月3日(土)

最近考えたこと

羽 鳥 理

数学の勉強をはじめたころは、どんな問題であれ、とにかくは解いてみようとした。その問題の数学内部での位置づけなどよりも、その真偽のみに関心があり、それを早く知りたく思ったものであった。そんな時出会ったのが関数環の実部に作用する関数を決定するという問題で、調和解析の古典的命題を抽象的に述べるという問題であった。肯定的な結果が得られれば、その形は単純であることが予想されていたし、勉強をはじめたばかりの自分にもわかりよい問題だと思ったから考えてみることにした。しばらく考えると、ひとつの結果が得られた。この方向でまちがいないと感じたので、以後そのままこまかくさぐり続けると最終的には解決できた。そのあと最初のきっかけとなったアイディアをもっとはっきりさせようと思い、一応まとめることができたと思う。問題点をあげればいくらでもあげることができるが、こんなことをいつまでも続けていてもしょうもないと思ったので、この続きはやめにした。それは、数学を勉強しはじめて数年がたち、数学的価値についてぜいたくを言うようになったからかもしれない。また、最初のころのように何でも解いてやろうという情熱がうすれてきたと言えるのかもしれない。いずれにせよ、もっと自分にぴったりの、実感のある数学をやりたくなったのである。

小平邦彦氏の『怠け数学者の記』の中の次の文章を読んで、この考え方は正しいと思うようになった。

“進歩のパターンは定まっているのではない。か。進歩の典型は生物の進化ですから、数学の進歩のパターンも生物の進化のパターンと同じではないかと思うのです。動物の進化のパターンは左図のようになっているという話です。3～4億年の昔、魚が進化して両棲類になった。しかし当時の最も進化した魚がさらに進化して両棲類になったのではなく魚としては幼稚(primitive)な形態のものが進化して両棲類になった。4億年も昔のことですから実際にどうなっていたかももちろんわかりませんが、一寸想像を逞しくしてみますと、当時すでに立派な魚で、海の表面に近い見通しのよい透明な水域を颯爽として泳いでいたのがいた。そういう魚の子孫は今でもやはり魚で、たとえば鯛で…(笑)。一方当時魚としてはすこぶる幼稚な形態で海底の泥の中をがむしゃらに這い回っていたのがいた。そういうものの子孫がいつの間にか陸上に這い上って両棲類になった。そして幼稚な形態の両棲類が進化して爬虫類になり…幼稚な形態の猿が進化して人間になった。”

それで泥の中は這い回ろうと思ったわけだが、考え方がよくとも、実際それができるかどうかは別問題であり、おおかたは泥の中にもれて終わりということになるだろうが、そこは日本のありがたいところで一度就職してしまえばあとは食うには困らない。

ところで小平氏は夏目漱石の『夢十夜』の中の運慶が仁王を刻む話を数学の研究にたとえておられる。その話は次のようである。

“運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。堅い木を一と刻みに削って、厚い木屑が槌の声に応じて飛んだと思ったら、小鼻のおっ開いた怒り鼻の側面が忽ち浮き上がって来た。其の刀の入れ方が如何にも無遠慮であった。さうして少しも疑念を挟んで居らん様に見えた。

「能くあゝ無造作に鑿を使って、思ふ様な眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独言の様に言った。するとさっきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通り眉や鼻が木の中に埋ってゐるのを、鑿と槌の力で掘り出す迄だ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだから決して間違ふ筈はない」と云った。”

小平氏は数学の研究とはこのようなものであると実感しておられるようである。漱石の話の続きでは、この男は彫刻とはそのように簡単なものなら、自分でも仁王が彫ってみたくなり、薪を片っ端から彫って見たが、不幸にもどの薪にも仁王は見当らなく、明治の木には埋っていないものだどと悟った、ということである。非常にいやな話である。

(数学)

□ 後期試験に備えて

1) 開館延長

1月17日、24日の両土曜日は午後3時から開館します。(平日は午後6時まで)

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限って、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

□ 表紙解説

タングラム版『フィロビブロン』

『フィロビブロン』は印刷技術の発明される百年前、1344年にイギリスの学僧によってラテン語で書かれたもので、“書物への愛”を語った世界で最も古い書物といわれている。

このたび、日本書籍出版協会・日本印刷産業連合会主催の1986年度造本装幀コンクールに於いて、革装の特別装丁で審査委員会奨励賞に選ばれた。

これは、ケルスティン・ティニ・ミウラ女史手造りのマープル・ペーパー使用による造本の豪華さが評価されたものであり、限定300冊中の1冊を当図書館にて所蔵している。

ミウラ女史は、1963年から製本装幀家の最高の名誉であるノーベル賞賞状の制作を行い、1975年には、製本装幀を芸術にまで高めた功績により、スウェーデン政府から“芸術家マイスター”の称号を授与されている。女史の装幀によるものは日本国内でも数少なく、当図書館で所蔵できたのは実に幸運という他ない。

『フィロビブロン—書物への愛—』

リチャード・ド・ベリー著 古田 暁訳

1985年8月発行 タングラム

(禁帯出 024/B94)

□ 編集後記

今回のエッセイは、新任の高津先生と羽鳥先生にお願いしました。また、50号を記念して表紙を色刷にしました。

閲覧ニュース 50号

発行責任者 手塚 甫

1986.12 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

電話 (0427) 78-8005